

「視覚的なわかりやすさ」で思考を深める学びの創出

大津市立田上中学校 授業改善リーフレット

はじめに

私たちは、視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚によって身の回りの情報をとらえ、それらを統合しながら生活しています。なかでも、視覚（ビジュアル）による情報の取得は群を抜いており、このことは、「百聞は一見にしかず」ということわざや、アメリカの心理学者であるメラビアンが提唱する法則（人と人がコミュニケーションを図る際、言語情報 7%、聴覚情報 38%、視覚情報 55%、という割合で影響を与えている。）にも通じる場合があります。

こうした私たちの視覚に係る特性をとらえ、学習場面において、視覚的なわかりやすさについて工夫したり配慮したりすることは、学習者の興味・関心を高めさせるだけでなく、理解を助け思考を活性化させたり、記憶に長く留めさせたりするうえで、とても大切なことであると考えます。

そこで、このリーフレットでは、「視覚的なわかりやすさ」をキーワードに、具体的に何をどうすれば誰にとってもわかりやすいものになり、思考を深めさせるものとなるのかについて探っていきます。

1、「視覚的なわかりやすさ」を生み出す6つの視点

次に示す6つの視点から授業改善を行います。

色を意識する

- 一定のルールによってチョークの色を使い分ける
- 配布用紙の色をかえる
- 色別のピブスを着せてグループをつくる



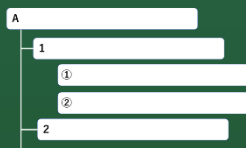
手順(流れ)を示す

- 【例】
- 活動の流れを番号をつけて事前に示す
 - スケジュール表や手順書を作成し、活動のはじめに確かめる
- ① めあてを確認する
 - ② 課題を知る
 - ③ 個人で考える
 - ④ グループで話し合う
 - ⑤ 全体で交流する
 - ⑥ 振り返る

※何に向かってどんなプロセスを踏むのかを、はじめに示す。

全体と部分を意識する

- 文字の大きさを変える
- 階層を意識し、先頭に記号を付したり行頭の位置を一段おとしたりする



カードを使う

- 一定のルールによってカードを使い分け、教室に定着させる
- 1枚のフラッシュカードで中心課題を際立たせる



今、言葉は乱れているといえるだろうか？

※各教科等のわくをこえて、共通のカードの使用が望ましい。

図や表にする

- 共通点・相違点を探る課題を設定し、図にまとめさせる
- 観点を設定し、表にまとめさせる



	観点①	観点②	観点③
A			
B			
C			

実物・映像を活用する

- 実物を提示し、実際に触れさせる
- タブレットPCで録画し、コマ送り再生で確かめさせる
- 画像付き学習プリントを作成する



※パワーポイントなどを使ったスライドを作成する際には、1スライドにつき、1図表。文字は20文字以内に。

2、「視覚的なわかりやすさ」に配慮した授業の実際

～特別な教科 道徳『二通の手紙』の授業（中学2年）～

ここでは、道徳の授業『二通の手紙（2年）』をもとに、「1」で示した6つの視点から、具体的な授業の姿を探ります。

『二通の手紙』のあらすじ

動物園の入園終了時刻をわずかに数分回ったところにやってきた高校生くらいの2人組の来園者。「ぼく、入れてあげますよ。」と言う同僚の山田に対して、「だめだと言ったらだめだ。」と入園の許可を出さない佐々木。佐々木は、山田に、何年か前に動物園の入園係をしていた元さんの話を聞かせる。

元さんは、勤勉な働きぶりを評価され、定年後も臨時職員として動物園で働いていた。ある日、入園終了時刻が過ぎてから幼い姉弟がやってきた。入園時刻を過ぎていることと、さらに、規則では保護者と同伴でないとう入園できないことになっているが、元さんは事情を察し、二人を入園させてしまう。ところが、閉園時刻を過ぎても姉弟は戻ってこない。園内の職員総出で二人の捜索が始まった。二人は遊んでいるところを無事に発見され、事なきを得た。数日後、元さんのもとに一通の手紙が届く。姉弟の母親から謝罪と感謝の言葉がつづられた手紙であった。その一方で、元さんは、もう一通の手紙を受け取る。それは、上司から今回の件を受けて解雇処分を知らせる手紙であった。元さんは、「この年になって初めて考えさせられることばかりです。この二通の手紙のおかげですよ。また、新たな出発ができそうです。本当にお世話になりました。」と語り、職場を去ったというのだ。

佐々木は、今回のようなことがあると、元さんのこの言葉がよみがえってくるのだという。

配慮①

1枚絵にして人物の関係を示す

右のように、中央に「佐々木」を配置し、「元さん」と「山田」とを対比できる位置に、幼い姉弟と高校生くらいの2人組も対比できる位置に配置する。また、「元さん」の話は、「佐々木」の思い出の中にある話であることを吹き出しによって示す。

これにより、ひと目で人物関係などをつかませる。



▲実際の「1枚絵」

配慮②

黄色のフラッシュカードで本時の授業における「キーワード」を示す

左のようなフラッシュカードを作成し、黒板の中央に配置。佐々木は、なぜ「だめだと言ったらだめだ。」と言うのかを深く考えていくことが、この授業の中心課題となる。



※佐々木は、山田に対して、「おまえがかわいそうだと思う気持ちはわかる。」と言いながらも、「だめだ。」と強く言う。そこにある佐々木の「真意」をさぐることに、この授業のねらいとなる。

配慮③

思考を助ける「構図」で見せる

※授業では、「元さん」の葛藤（入れるか、入れないか）について、丁寧に扱いたい。

中央のフラッシュカードを境にして、左右に「入れる」「入れない」と板書し、それぞれの理由を、「元さん」の思い、自分の思いを確かめながら進める。その判断によって届く手紙が、一方は謝罪と感謝の手紙であり、もう一方は解雇処分を知らせる手紙であることをつかませる。

配慮④

あえて課題を見せない学習プリント

授業で使う学習プリントは、右の例のように、授業の「導入」で扱う課題のみを示し、授業の「展開」の中で扱う課題は、あえて記載せず、見せない。すべてを見てしまうことで、生徒の思考が、今まさに考え合っている課題を追い越し、次の課題へと勝手に上滑りしてしまうことを避けるためである。課題は、そのつど生徒に提示し、生徒によってプリントに書き込ませる。

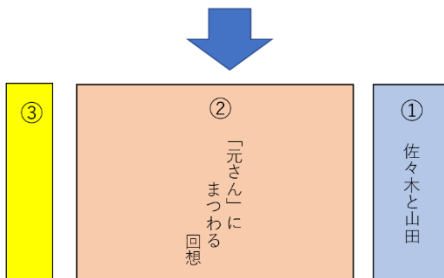
※道徳の授業の「導入」というものは、その授業が終わった後に生徒につぶやかさせたことは何であるかを指導者が明確にしたうえで、それとは真逆の内容のつぶやきにまつわる経験を、これまでの生活の中から思い返させるようにするとよい。今回の場合は、「だめだと言ったらだめだ。」の真逆である「そんな固いこと言わなくてもいいじゃないか」という思いをした経験を思い返させたい。これが、この授業のスタートラインとなる。

道徳 学習シート		月 日 ()
準備	今までに、「そんな固いこと言わなくてもいいじゃないか。」という思いをした経験はないだろうか。なぜそう思ったのかと合わせて、思い返してみよう。	
今日の学習のテーマ		
課題①		
課題②		
●今日の学習を終えて、深く考えたことや感じたことをまとめよう。		

配慮⑤

教材文を「小分け」にして見せる

教材文の全文



③は、授業では使用しない

この授業では、教材文のすべてを見せることはせず、左のように3つに分け、小分けにした①と②を小出しにして使用する。

授業の前半では、①を使って、自分ならどうするかを中心に十分に議論する。

授業の後半では、②を使って、「元さん」の気持ちに寄り添い、「元さん」の心の中を深く探っていく。

③は、授業では使用せず、その代わりに、「佐々木は、元さんにまつわる話を聞かせた後、山田に対して何と言ったでしょう。佐々木になったつもりで考えましょう。」と示して考えをまとめさせる。

※道徳の授業における教材文については、指導の効果があがる扱い方を心がけ、この後自分ならどう行動するかを考えさせたり、どうなるかを予想させたりする。教材文の特質をとらえ、その全てをはじめから見せてしまう必要はない。

配慮⑥

事前の「板書計画」がなにより大切

何を板書し、何は板書しないか。板書にどんな言葉を記すか。事前に「板書計画」を立てておくことがなにより大切。盛り込みすぎず、シンプルに。見た目にすっきりとしていることに配慮する。

▲この授業の「板書計画」

※道徳の授業に限らず、板書は「生徒の思考ボード」のつもりで計画しましょう。1時間の授業で黒板1枚となるように普段から心がけ、事前に生徒とも申し合わせておくと、ノートをとりにやすくなる。すぐれた板書は、それ自体がよりよいノートづくりの指導にもつながる。

